
「クロ」

稲妻劔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「クロ」

【Nコード】

N4464G

【作者名】

稲妻剣

【あらすじ】

主人公ののぶおは子犬を飼おうとするが、父親の子供のころに飼った愛犬との悲しい別れを聞く。

(前書き)

のぶおは動物が大好きな小学四年生でした。

お父さんが休みの日には、よく上野の動物園につれて行ってもらいました。でも、このごろは仕事がいそがしいといって、ずいぶん動物園には行っていません。

のぶおのお母さんもはたらきに行っています。

パートタイムという仕事でした。夕方の四時にかえってくるのです。

のぶおは学校が終わると、犬をかつているきんじょに住んでいるあきらくんのところによく遊びにいきます。

のぶおは犬がほしくて何度かお母さんにたのんだのですが、お母さんは「うちは、団地だから動物はかえないのよ」というのです。

でも、同じ団地のほかの家ではないしょでかっているところがあるのです。

ついにある日、のぶおはお母さんに言いました。

「クロ」

のぶおは動物が大好きな小学四年生でした。

お父さんが休みの日には、よく上野の動物園につれていってもらいました。でも、このごろは仕事がいそがしいといって、ずいぶん動物園には行っていません。

のぶおのお母さんもはたらきに行っています。パートタイムという仕事でした。夕方の四時にかえってくるのです。

のぶおは学校が終わると、犬をかつているきんじょに住んでいるあきらくんのところによく遊びにいきます。

のぶおは犬がほしくて何度かお母さんにたのんだのですが、お母さんは「うちは、団地だから動物はかえないのよ」というのです。

でも、同じ団地のほかの家ではないしょでかっているところがあるのです。

ついにある日、のぶおはお母さんに言いました。

「ぼくのともだちのところまで、かわいい犬の子供が生まれたんだ。

ぼくにも、いっぴきくれるって。だから、ぼくはほしいっていった」それを聞いたおかあさんはこまった顔をしました。

「お父さんにも、ぼくはどうしてもほしいって言ってやる」

のぶおは、ひとりでおこったように言う。「ぼくは、ごはんはいらない」といって、ふてくされてねてしまいました。

お父さんは、いつも夜おそく帰ってくるのです。

のぶおはほんとうはおなかはすいていたのですが、いつのまにか眠ってしまいました。

つぎの日の朝に、のぶおがおきてもお父さんはまだねています。

のぶおはおなががすいて、いつもより早く目がさめたのです。お母さんは台所で朝ごはんを作っていました。のぶおはいばった歩きかたでお母さんのそばにいくと言いました。

「ねえ、子犬のことお父さんに言ってくれた？」

お母さんは料理をしながらいいました。

「言ったわよ。でも、むつかしそうね」

のぶおは、お母さんの言ったことを聞くと、はらがたったのでわざと足音をたてて歩いてお父さんをおこそうとしました。

「のぶお、お父さんはつかれているんだから、しずかに歩きなさい」でも、のぶおのけっしんは強く、いじをはってよけいに大きな足音をたてて歩きました。

そのうちにお父さんがおきてきました。

ちよっとこわい顔をしているようにのぶおには見えました。でも、のぶおには何にも言いません。

お父さんは、だまってしんぶんを読んでいます。

のぶおはわざと、お父さんの近くをどすどすと大きい音をたてて歩きます。

「のぶお、今日はおとうさんは早くかえられる。それまでに、お母さんにわがママを言ってこまらせたら、おこるぞ」

のぶおにはあまりおこらないお父さんの顔が、今日の朝はこわい悪ものの顔に見えました。

のぶおは自分だけであってにきめて、あきらくんのところで生まれた子犬をもらってきました。

お父さんもお母さんも、このかわいい子犬を見たらかわいくてほしくなるぞ。

のぶおはそうおもい、ひとりできめてもらってきたのです。

まだ、よちよちと歩く子犬はうすい茶色でぬいぐるみの犬のようです。のぶおは名前をなんてつけようか、いろいろな名前がうかんできます。コロ、チビ、タロウ、ゴン、ドン、かんがえるとなかな

か気に入る名前ができません。よたよた歩いているからヨタにしようか、でもまだ小さいからチビにしようかとかんがえがきまりません。

ミルクを子犬は口のまわりを白くしながら、小さなしたでぺろぺろとなめながら飲んでいきます。のぶおもマネをしたのですがむづかしくてだめです。のぶおはひとりで感心しながら「へえおまえはきようなんだなあ」と、子犬に話しかけています。

のぶおはいい名前がきまるまで「チビ」ということにしました。そのうちにお母さんがかえってきました。

のぶおは、お母さんに「おかえりなさい」ともいわないで、チビとねころんであそんでいます。

「のぶお、その子犬はどうしたの?」と、お母さんに聞かれて、のぶおはとくいそうに子犬をだいてお母さんに見せました。

「ねえ、お母さん、かわいいでしょう。チビっていうの」

お母さんは「この子つたら、ほんとうにこまったわねえ」と言いながら、台所で夜ごはんの用意をはじめました。

六時になるとお父さんがかえってきました。

「これはね、チビっていうの。もっといい名前がきまるまではチビにしたんだ」

おとうさんはだまつたまま、子犬とのぶおをじろりと見ました。

「さきに、ふるに入る」

お父さんはなにか言いたそうでしたが、ふるからあがるとごはんを食べています。のぶおも子犬にミルクをあげながら、お父さんだつてほんとうは好きなんだ。だから、だまつているんだ。ただ、団地だから反対したけど、このチビを見たらかわいいと思っっているんだ。のぶおはだまつてかんがえながら、お父さんの顔をちらっと見てはごはんを食べています。

「のぶお、話があるからちゃんとすわりなさい」

お父さんがのぶおに言いました。

のぶおは、ごはんを食べおわるとすぐにチビと遊んでいました。

お父さんの顔はいつもより少しこわい感じですよ。

のぶおは、もしチビをうちにおけないと言われたら家出をしてやる。のぶおはもうチビとはなれるのはさみしいし、チビはじぶんを守って育てるんだと、心にきめていました。お父さんなんかこわくない、と自分で自分に言いきかせていました。

「かわいい、子犬だね」

お父さんはやっぱりチビが気に入ったんだ。こんなにかわいいんだから、だれだって好きになるさと、のぶおは心のなかでつぶやきました。

「のぶお、これから話す、お父さんのはなしをしつかりと聞きなさい」

のぶおは、今までのお父さんの顔とちがうので、ついチビを強くだきました。それを見たお父さんはのぶおに言いました。

「その子犬は、もうやすませなさい」

のぶおは、しびしび段ボールで作った小屋にチビを入れました。

お父さんはのぶおの目をまっすぐに見ました。

その、お父さんの目を見たら、のぶおのしんぞうがおおきくどきどきとしてきました。

お父さんはどんな話をするんだろう。のぶおは、こんなふうにお父さんがこわいかんじではなしたことはなかったからです。

お父さんは、話を始める前に少しだけ目をとじました。その顔は気のせいかすこし悲しそうに見えました。

「お父さんも、のぶおと同じ子供のころに犬をかってた。お父さんは、九州の福岡というところの小さな村で生まれた。もう三十年も前のことだ。家庭の事情といっても今の、のぶおにはまだよく分からないだろう。そのときの話しは、まだ今ののぶおには本当はあまりしたくなかったけれど、これからのお父さんの話を聞いてからのぶおはそのチビのことをじぶんでかんがえなさい。わかったね？」

のぶおは「わかった」と、ちいさくうなずきました。

*

お父さんは、さるとりという名前でした。さるとりと言う名前は父親がかしこくなるようにと考えてつけたそうです。

さるとりは体はけんこうでしたが、二さい上のきよしというお兄さんは病気がちでいつも学校を休んでいました。ふたつ下の弟はたけるといって、たんきでけんかばかりしていたそうです。

さるとりは男三人兄弟の次男でした。生まれた時は四キログラムのおおきな赤ちゃんでした。お父さんは大工でした。

お母さんは、さるとりが生まれた家に養女としてもらわれてきました。そこにお父さんがむこ養子としてきたのです。だからふたりとも、その家の本当の子供ではなかったのです。

お父さんはすでに、子供の時に両親を亡くしていたのです。

お父さんが結婚した家には鶴崎ヤクというおばあさんがひとりで生活していました。それでお母さんを養女をしてお父さんをむこ養子にしたのです。これは家系を続けてなくさないためでした。

でも、子供のさるとりはそんなことはよくわかりませんでした。

さるとりは体がとても健康で力も強く、すもうをしても同じ年や二つ上の男の子でもさるとりには勝てませんでした。ただ、とても内気で人見知りをする性格でした。学校のトイレに行くのも大変な勇氣が必要でした。家に知らないひとが来るといつもかくれていたのです。

学校でもさるとりはみんなの前で教科書を読んだり、歌ったりすることができませんでした。

さるとりの内気でおとなしい性格は、いじめっこたちにかかわれました。でもさるとりは体も大きく力も強いので、けんかでいじめることはできませんでした。

いじめっ子たちが、四人でさとるにかかってもすぐ投げ飛ばされるのです。だから、さとるの弁当のなかにどろを入れたり、遠くから石をなげたり、教科書に落書きしたりといったことをしました。それでもさとるは先生にも親にも誰にも言わなかったのです。

さとるはじぶんがめだつのがいやでした。それとひとに勝ったり、負けたりすることも、なぜかいやでたまらなかつたのです。

弟は相手が何人いようが勝つまでたたかいます。相手が年上でたけるが負けたらそれこそ大変でした。何度も向かって行き、さいごにはかみつくのです。それで、相手がこわがって逃げるとしつこく相手の家のまわりを夜になるまで出てくるまでみはっているのです。相手が泣いてあやまるまでそれを続けます。

お兄さんは学校は病気でいつも休んでいたのですが、こういうわけか成績はいつも一番でした。

さとるが小学三年の時にお父さんが子犬をもらってきました。

さとるは友達がだれもいなくても子犬がいるのでさみしいということはありませんでした。学校の宿題もしないで子犬とばかり遊んでいました。

さとるたちの村には保健所から野犬をつかまえるひとがよくきていました。子供たちは「いぬころしのおじさん」と呼んでいました。その子犬は黒い毛の色だったのでクロという名前をつけていました。

寝るときもいつもクロといっしょでした。

ある日、さとるが学校から帰ると、いつも飛びついてくるはずのクロがいません。

さとるは、村のはずれまで行ってあちこちとさがしましたが、どこにもクロはいません。さとるはかなしくて、かなしくて涙がとまりません。暗くなった道をクロの名を呼びながら家に帰りました。

お父さんは「クロは、犬ころしにもって行かれたんだ」と言いました。

「また、もらってきてやるから、もう泣くな」

泣いている、さとるにお父さんは言いました。

さとるはしばらくのあいだ、もしかしたら学校から帰ったらクロが帰ってきているかもしれない。家についたら、しつぽをふってじぶんのまわりを走りまわってとびついてくるかもしれない。そう思いながらいつも帰るのですが、いつまでたってもクロは帰ってきませんでした。

まだ大人になっていなかった、子犬のクロがどうなっているのか考えたくなかったのです。さとるはできたら「犬ころし」ということばを消しゴムで消したかったのです。

夏休みになると、クロのことは子犬を見たときに時々思い出すていどになりました。近くにある大きなちくご川にいつては泳いだり、魚をつつたりして暗くなるころまで遊んでいました。

田舎には遊ぶところがたくさんありました。田んぼに水を送るための用水路があつちつこつちにあります。その細いところにも魚やゲンゴロウ虫や赤い小さなカニ、ザリガニ、すっぽんの子など、いろんなものがいました。竹やぶのなかにかくれがを作ったり、木の上に登って遠くをみたり、かぶと虫やセミをつかまえたり、遊ぶことはいっぱいあったのです。夏休みが終わるころには日焼けしてまっ黒になりました。

秋になるといつも台風がきて川がはんらんし、ていぼうがくずれて二かいにひなんしました。にこつた水が村をみずうみに変えました。死んだ牛ややぎなどが浮かんで流されていくのをよく見ました。町の消防団の人たちが船をこいで二かいにひなんしている村のひとたちにおにぎりをはこんできます。

高い木にはたくさんさんのへびが枝という枝にまきついています。

水がどこかに流れて、地面が出てきてもどろや流されてきたいろんな、なべやすこつぷやたんすやこわれた家具とかがたくさんあり

ます。

小さな溝にも川のこいとか大きなうなぎとかがいて、それをお父さんのこぎりをもっていつてつかまえました。浮かんでいるこいなどを、のこぎりで叩いて気をうしなわせてつかまえるのです。

さとるは、お父さんのまねをしましたでしたがそれはへたでした。たまたごうとしても魚がにげるほうが早くて失敗ばかりでした。

おばあちゃんは冬のさむい日に亡くなりました。八十才でした。

さとるがもうすぐ小学四年になる前でした。気性のはげしいおばあちゃん、さとるや、たけるなどが村の子供にいじめられたり、村のおとなのひとに何かされたりすると草かりがまをもってどなりこんでいたのです。村人は「あのヤクしゃんはこわかなあ」と言っていました。

さとるがまだ、三才の時におばあちゃんにおんぶされていた時のことです。背中のおえでさとるが動いてゆらすとおばあちゃんが「こら、こらゆらすな」というのですが、おばあちゃんがふらつのがおもしろいのでどんどん強くさとるはゆらしたのです。おばあちゃんにはばらんすをくずしてついにたおれました。

それでもさとるをかばって手をはなしませんでした。おばあちゃんは顔から前にたおれたのです。その時におばあちゃんの鼻がつぶれました。それでも血だらけの顔でさとるのことを「なんともないか」としんぱいそうに何度もさとるに聞きました。さとるはそれからは、二どとおばあちゃんの背中におんぶされてもゆさぶることはしませんでした。

さとるがわるいのですが、だれに聞かれてもおばあちゃんは自分の年のせいにしたのです。

おばあちゃんが死んだら、さとるの家族はその村にとっては完全に「よそも」になりました。さとるは子供でしたが村人のさとるの家にたいするたいどが変わったことが分かりました。

さとるが四年生になったある日、お父さんがまた、子犬をもらってきました。前と同じような黒い子犬でした。目の上のまゆのところが足の先だけに白い毛がはえていました。名前はまた、クロにしました。

さとるは、前以上にクロをかわいがりました。今度は大きくなるまで、家のなかにしつかりとつないでおきました。

「これは、クロのためだからね。がまんするんだよ」

さとるはくんと鳴くクロに話しかけて、学校にいきました。

学校から帰ると、すぐになわをほどいて外と一緒に走ったりじやれたりして遊びました。

クロはぎっしゆの犬でした。だからおとなになってもあまり大きくなりませんでした。

近所には大きな犬をかつている家があつて、何度か吠えられたり、追っかけられたりしたことがあつたので、大きな犬はあまり好きになれませんでした。

それに、けつとうしゆの犬をもっている村の人はぎっしゆの犬をばかにしていたのです。

半年もすると、クロは走るのもプロレスごっこをしてもさとるのほうがちやくにクロに負けるようになりました。

学校の帰りにさとるが家の近くまでくるとクロは走ってむかえにきます。しっぽをさかんにふってさとるに何度もとびつきます。それで、雨の日はさとるの服はどろだらけになります。

クロの体は、そんなに大きくはないのですがすばしいのです。さとるはもうクロをしばらくしないで学校に行くようになっていました。

でも、ほんとうはさとるは学校に行くより、クロと遊ぶほうが楽しかったのです。

村の人が、よくうちに来て怒っていました。

「お前のところの犬が、うちの畑をあらしていた。ちゃんとしばっ

ておけ」

さとるの前では「そのバカ犬は、うちの畑にいたらこるすぞ」と言っ
てこわいかおでにらみます。

ク口は齒をむいて、さとるをおこる人に吠えました。おこった人は、木のぼつでぶとうとしてもク口はすばしっこいではなれては吠えます。石を投げてもかんたんには当たりません。

さとるが学校に行っている時は、またなわのひもでク口をつないでおくのですがク口はかんたんに噛みきってしまうのです。ひもをつけたまま、学校から帰ってくるさとるを走ってむかえにきます。

ある日から、さとるのお父さんとお母さんがよく言い争うようになり
ました。

おとうさんの仕事が少なくなり、もらうお金もへったようでした。夜ごはんの時など「うるさい！」と言ってお父さんはよくごはんやおかずがのっているちゃぶだいをおこってひっくり返してしまし
た。

おばあちゃんがいなくなつてから、さとるの家庭はなぜかうまく
いなくなつてきました。

村人のみんなが、さとるの家庭をいやな顔つきでみるようになって
きました。何かものが無くなつたり、こわされたりするとみんな
さとるの家の者がやったと村のひとは言います。

そのうちに、同じ年ごろでよく一緒に遊んでいた村の子たちもさ
とるの家の子たちとは遊ぶなといわれるようになりました。

そのころは弟のたけるはガキ大将でしたので、学校では村でしら
ん顔をする同級生をよくなぐつたりして先生におこられていました。
村でのさとるたちと村人たちのなががよくないことを学校の先生
たちは分からなかったのです。お兄さんは勉強ができたので先生か
らは気にいられていましたが、やはり自分の村でのことはだまっ
ていました。

さとるは学校ではいねむりばかりしていました。さとるは学校は

ただ、たいくつなだけでした。でも、病気で休んだことも、ずる休みしたこともほとんどありませんでした。

さとのが四年の秋のときに、お父さんが心の病気になったのです。お父さんは、長く病院にいなければいけないことになりました。

お母さんも、遠くにはたらしきに行つて家には帰つてきません。

一カ月に一かいか、二かい帰つて来たのですが、そのうちにほとんど家には帰つて来なくなつてきました。

家には、そのうちに何も食べるものが無くなつてきました。弟のたけるはお父さんの入っている病院に行つてお父さんのごはんを分けてもらつたりしていました。それまでは遊びだった魚とりは自分たちのごはんのために取るようになりました。

学校があるときはまだ給食が昼間だけありましたが、土曜日や日曜日とかの休みの時は、自分たちの食べ物自分たちで何とかしなければならぬのです。秋には柿とか栗とかの食べ物がありました。冬になるとかんたんには食べ物はありません。

冬休みになると、さらに食べ物を見つけるのがむずかしくなりました。よその家の畑に行つて食べられるものを盗むようになりました。干しガキもそうです。それには一番すばしっこいたけるがかつやくしました。

着る服もなくなり冬でも短パンに下着で足ははだしでした。

ク口も自分で自分の食べ物はどこかで見つけていたようです。

時々はけがをして帰つてきましたが、治つてはまたどこかで自分の食べるものをさがしに行きました。

村人はさとの家の子供は「わしらのものをぬすんでいる」というつわさが広まり、ますます嫌われるようになりました。

さとの家も、かなりあちこちいたんできて雨がふると雨もりだらけでした。ふとんもぼろぼろで兄弟三人とク口はかたまっていつも寝ていました。

たまに、お母さんが帰つてきました。

さとのたちはその時は食べることが出来ましたが、またすぐにとど

ここに行つて帰つてきません。

赤い口をして、へんなにおいがお母さんの体から匂いました。冬をすぎるころ、お兄さんは、せいかつほごというお金をもらいに町までもらいに行つていました。

村のなかには、こつそりと少しの野菜を夜中においていく人もいました。さとのるの家に、なにも食べるものがないと知っている村のひとです。だれだかはわかりません。

そのひとがさとのるの家に持ってきたことがわかると、そのひともしじめられるからです。

でも、さとのるはそのひとがだれか、何となく分かつていました。町から村にお嫁にきた女のひとです。さとのるたちを見る目でわかるのです。いやな目でさとのるたちを見ないからです。

「せいかつほご」のこととか、冬休みが終わつてから学校の給食がさとのるの家に生徒が運んでくるようになったのは、先生があまりにさとのるたちのかつこうがおかしいのと、学校にはらうお金がなにもはらわれていなかったからです。

それは、ぜんぶ先生がやってくれていたのです。先生はさとのるたちの家に来てみておどろきました。子供三人で生活していたからです。それで、先生はお父さんの病院に行ったよかったです。

でも、クロがいたのでまわりがどんなにさとのるたちを、いじめてもあまり気にはなりません。びんぼうでしたが、さとのるはあいかわらずけんこうでたいかくもよかつたのです。

さとのるが五年生になるころにお母さんが帰つてきました。

お父さんと別れるというのです。お父さんはまだかんぜんに病気は治つてはいませんでした。

前はたばこを吸わなかつたお母さんがたばこを吸っていました。

さとのるの家に、お父さんがいないせいか、しらないおじさんがよ

く来ました。そのおじさんはさとるたちにやさしくするのですが、なぜか好きになれません。でも、いろんなおみやげとか持ってくるのです。

お兄さんは「そんなもの、食うな」といっていました。

お父さんはまだ病気が治らないのに退院してきました。家に帰った、お父さんとお母さんは何度も口げんかをしていました。

お母さんは「びんぼうはいやだ」とか「こんな村もきらいだ」とも言っていました。

子供のさとるたちはそれを聞いているだけでした。

そして、お父さんとお母さんは別れることになりました。

お母さんは、弟のたけるを引き取ることになったのです。

お父さんは「もう、ここでは仕事がない。だから東京に仕事をさがしに行く」と一人で東京に行きました。

弟のたけるは、別れたお母さんのところからバスでさとるたちの学校にかよったのです。

お母さんは、知らないおじさんとくらしていると弟のたけるは言っていました。たけるのはなしを聞いていると、さとるとお兄さんのきよしははらがたつてきました。そのおじさんにも子供が二人いて、子供に新聞配達させて自分は昼間からお酒を飲んでいるということです。

さとるとお兄さんのきよしは相談して弟のたけるを連れ戻そうとしました。

たけるの住んでいる所は久留米市というところでした。

さとるとお兄さんは、バスに乗ってたけるに聞いた住所をたよりにいろんなひとに聞きながら、やっとたけるの所に着きました。

バスで六つもの駅を乗るのです。歩いたらどのくらい時間がかかるのか分かりません。

たけるの住んでいる近くには月星ゴムという大きな工場がありました。長くつとか、運動ぐつなどを作っている工場でした。学校で見学に行ったことがあります。

たけるの言ったように赤い顔をしたおじさんがいました。お母さんはおとなしく座っていました。少しこまったような、めいわくそんな顔をしています。

さとるはもうこのひとはお母さんじゃない、他人のおばさんだ、と思いました。

さとるもお兄さんのきよしも、そのおじさんは一目できらいたと思いました。酒を飲みながら赤ら顔でえらそうに座っていました。

そのおじさんの子供もいましたが、女の子と男の子でした。女の子は中学一年といていましたが、やせて細くておとなしそうな感じでした。男の子はまださとると同じぐらいでしたが、やはりやせていて、みているととてもかわいそうな気がしました。お兄さんのきよしもさとるも、こんな家にはたけるをおいておくわけにはいかない、と強く思いました。それで、たけるにバス代をわたしてすきをみつけて帰ってこい、と二人で言ったのです。

二日たって、たけるは帰ってきました。たけるのくるのがおそいので心配していたのですが、たけるは間違えてふたつ手前のバスの停留所でありたのです。それで歩いていてお腹がへったのでパンを買ったら、バス代のお金が無くなって迷子になりながら、やっと帰って来たのでした。どこをどう歩いたのかよくおぼえていないといっていました。さとるとお兄さんは安心しました。

お父さんが東京から仕事を休んで帰ってきました。たけるのことを話すと「そうか、そうか・・・」と言って泣いていました。

お父さんの話しでは東京には仕事があるから、そのうちに東京に呼ぶと言っていました。それまでは、東京と一緒に仕事をしている家族がとなり村にいて、その家族の家であずかってもらえるようにする、ということになったのです。

お父さんはそこはあずかってもらう他人の家なので、犬のクロマでは連れていけないということでした。

クロと、別れるということにはつらいことでした。

お父さんはそのじゅんびができたらずぐ帰ってくるというて、また東京に行きました。

さとはは、クロと離れるなどは考えたこともなかったのです。それに、クロはさとるに一番なついていたのです。

お父さんは、十日ほどたつてまた帰ってきました。

さとるには、クロはかわいがつてくれる家にもらつてもらうから心配しなくてもいいと言いました。

でも、さとはは何にも分からないクロにはどう説明すればいいのかわかりません。さとるがクロを抱きしめてなくてもクロはうれしそうにさとの顔をペるペるとなめてしっぱをふるだけです。

さとははふくざつでした。学校にいつても落ち着きがありません。お父さんはそんなに長く仕事を休めなかったのです。二日で、さとるたちを知り合いの家に連れていかなければいけませんでした。

さとるが学校から帰つてくるとクロはどこにもいません。

さとるが、学校に行っているあいだにおとうさんがクロをもらつてくれる家にもう連れていっていました。

さとるの家の荷物はトラックに全部つまれていました。全部といつてもほんの少しでした。

お父さんは、これからあずけられる家にもお前たちと変わらない子供が三人いるからなかよくしなさいと言いました。

お父さんは、長く住んだこの村のけしきを走っているトラックからじつと見つめていました。

「クロは本当に、かわいがつてくれる家に連れていったからな」
さとるには、どこに連れていったかは教えてくれませんでした。

となり村で、さとるたちがあずけられる家は、さとるの住んでいた家から五キロメートルぐらいはなれたところでした。

そこから今までの小学校に通うのです。歩く和二時間ぐらいかかりました。それまでも学校まで歩いて五十分はかかっています。

あずけられる家は大きな農家でした。

その家はお父さんと同じ仕事をしている家族のしんせきだったのです。

お父さんは、さとるたちをあずかってくれる家のおじさんやおばさんにていねいにあいさつをしてから「みんな、なかよくしろよ」「とさとるや兄と弟にも言いました。

その日の夜、お父さんは東京に行きました。

今まで、さとるたちが住んでいた村の生活とはがらりと変わりました。

ごはんは毎日食べられるのです。その家の人たちはみんないいひとでしたが、その村にもいじめっ子はいました。

でも、さとるはそこでもすもうや力は一番強かったのです。

たけるは相手がだれでもかんけいなくけんかしました。たけるは小さかったのですが足も速くて、すばしこかったのでかんたんにはまけません。負けたら、勝つまでつきまといます。

お兄さんのきよしは度胸がありました。おどされてもおびえないのです。

一度、よそものということで、五人のいじめっ子たちにさとるときよしを取り囲まれたときに、ひとりがナイフを出して笑いながらおどしましたが、きよしは「させるものなら、さしてみろ」といって相手をにらみ付けました。いじめっ子たちはナイフで相手がこわがると思っていただけなのか、そのナイフをちらつかせただけで何もすることは出来ませんでした。

「さとる、いいか、こわがると相手はおもしろがって、よけいにいじめるからぜつたいにこわがるな」

さとるはどうなるかと思いましたが、ほっとして「うん」と言いました。

何日かたって、またあのいじめっ子たちに今度はさとるだけがつかまったのです。やはり、ナイフを出してこわがらせようと思いました。さとるはお兄さんの言ったことを思いだして、何ともないふりをつけていました。もし、相手がナイフを使わないでかかってきた

らすもつのように投げ飛ばせばよいのです。さとるは学校では三十人をすもつで勝ち抜いたことがあるのです。ただ、気が弱いだけでした。さとるがだまつているとそのうちに「こいつ、かわってんな」と言っつて、何もしないでいじめつ子たちは行っつてしまいました。

さとるはとなり村ではそんなことが続いたので、クロのことは考えるゆとりがあまりありませんでした。

それでもクロに似た犬を見たりすると思っつ出して、やはり悲しくなりました。

とくに、ふとんのなかに入っつてクロのことを考えだすといろんな事を思っつ出しました。

初めて、クロがお父さんに連れられてきたときは、本当に小さくてよたよたと歩っつているクロは何ともなさけない顔付きでかわいっつていつも自分がつっついていないと不安でした。初めて水のなかに入れた時必死で水のなかで手足をうごかして、くんくんと鳴っつて助けをもとめていました。穴ぼこにおっつこっつてはい上がれなかつたり、自分より大きな犬とけんかしてきずだらけになっつて帰っつてきたり、一緒に川で泳いで流されたり・・・。

さとるのあたまのなかでクロと過ごした思っついでが次々と出てきまっつす。今ごろクロはどこでどうっつしているんだろっつ、元気なんだろっつか？クロはいがいとおっつちよこちよいだからなあ。と考っつているうちにさとるは眠っつてしまいます。

十日ほどたっつて、さとるが学校から帰っつてくるとクロが飛び付っつてきました。しっつぽをさかんにふり、さとるの周りをぐるぐると駆っつけ回っつてはさとるにとびつきまっつす。うれしそっつうに吠えながら地面を転がっつては、とびおきてさとるにぶつかっつてきまっつす。

さとるは、クロの首に血がにじんでいるのをみまっつした。

クロはひもを噛みちぎっつてきたのです。でも、どうやっつてさとるのいる家がわかつつたのか不思議でした。

でも、さとるはうれしくて、うれしくてクロの名を何度も呼びま

した。クロはそのさとの声に答えるように駆け回ってはさとるに飛び付きます。さとるは首にかかっているひもをはずしてやりました。かなりじょうぶなひもでした。何度も、何度も噛んだのでしよう。クロの口のあたりも切れてキズがありました。

クロがさとのところに来た夜に老人の夫婦がたずねてきたのです。

クロはたずねてきた老人の夫婦のところにもらわれていたのです。

子供がいない老人の夫婦は、クロが毎日夜中じゅうかなしげに吠えて、鳴いていたといました。まさかあんな、じょうぶなひもを噛みきつて逃げるとは思っていなくて、そのうちにあきらめるかと思っていたそうです。

クロの鳴き声は、老人の夫婦にも聞くのはつらかったと言っていました。

さとるは、またクロと別れなければなりませんでした。でも、その老夫婦もとても悲しそうでした。さとの気持ちが老夫婦にはよく分かったからです。

老夫婦は何度もお礼と、さとるにはすまなさそうな顔で頭を何回もさげてはクロを連れて行きました。

さとるは、自分でもどうしようもないふくざつな気持ちでした。

その夜は、どうしても別れる時のクロの顔と、鳴き声が浮かんで消えなかったのです。朝近くまで泣いていました。泣きつかれて、いつのまにか眠ったのです。

それから、しばらくはクロのかなしげな顔と鳴き声が浮かんでなかなか消えません。

学校に行っても頭がぼやっとして勉強も出来なかったのです。クロのことを考えると頭がこんらんしました。でも今のさとるにはどうすることも出来ないのです。ただ、悲しいだけでした。

あの老人の夫婦の顔もかさなつて、さとるはなんとも言えないふ

くざつなきもちで胸がくるしくなりました。

自分の親が別れた時よりも苦しいのです。さとるには初めてのたいけんでした。

何日かはぼんやりとして、自分でも何にも考えられませんでしたが、相変わらず、いじめっ子たちがさとるをいじめようと取り囲んだりしたので、さとるのようすが何となく変なので、気持ち悪がって、そのうちに相手にしなくなりました。

さとるは、自分にこみあげてくるこの感情はなんだろう?と思いましたが。

両親が別れた時の感情とはくらべようもない強い感情です。

何か、怒りにも似ています。さとるは、ほんとうに怒ったことはなかったのでよく分からなかったのですが、体中が熱くなってくるのです。

誰にも、この怒りのような思いをぶつけることは出来ません。

まだ、自分が子供であることがとてもやさしいのです。

さとるが何を思っても、考えても自分の出来ることは何ひとつ無いのです。

何も出来ない自分に、どんどんはらがたつてくるばかりです。

何にもしなくても、体がだるくなってしまいます。でもクロはもっと悲しいはずです。なにもわけがわからずに、さとると引き離されたのですから。そう、思うとますますさとるは苦しくなりました。ついにさとるは高い熱をだして寝込んだのです。お医者さんがみても、さとるの熱の原因は分かりません。

さとるはまる三日間もねていました。

まわりもずいぶん心配しました。今まで健康だったさとるがこんなにねこむことはなかったからです。

さとるはこの三日間ずっとゆめを見ていました。

クロと自然のなかですつとあそんでいたのです。ゆめのなかでは

クロは人間のように話すことができたのです。いっしょに空をとぶこともできました。いろんな国にも行って来ました。クロはゆめのなかでは大きな強い犬でした。かいぞくをやっつけたり、子供をさらうわるものをこらしめたり、ゆめのなかでは、クロはせいぎのみかたでした。みんなから、したわれるえいゆうだったのです。クロは、人間を食べるおおきなりゆうともたたかいました。クロはその時は、なんメートルぐらいにも変身することができたのです。すごいたたかいでした。クロも、かなりキズをつけられましたが、クロのするどいきばやつめでさいごにはついに大きなりゆうをやっつけたのです。

さとするは、クロの背中によって行きたいところに自由に行けました。

一番のつよい相手は二つの頭をもった大きな鬼でした。赤い頭と黒い頭があつてすごくこわい顔でした。赤いほうは女の人間を食べ、黒いほうは男の人間を食べていたのでした。

高い山をまくらにしていつもその鬼は寝ていました。その鬼が立ち上がると雲の上にもでとどくほど大きいのです。

さとするは、こんな大きい鬼は初めて見ました。絵本などでは見たことはありませんが、じつさいにみるとすごいはくりよくです。

でも、クロはその鬼にも負けないくらいに大きくなりました。たくさんの人々は遠くにはなれてクロと鬼のたたかいを見ていました。鬼がうごいても、クロが歩いてても大地がじしんのようにゆれました。鬼とクロがぶつかるたびに山がくずれのです。人々はそのたびにしんどうで二メートルくらい地面からはねあがるのです。

鬼とクロのたたかいは二日も続きました。

高い山がいくつも平らになりました。あしあとは大きな穴になり、みずつみはうめられてしまい、どちらが勝つかだれもけんとうがつきません。

鬼とクロがたたかった場所のけしきはすっかり変わってしまったのです。クロの力をこめたいちげきが赤いほうの頭をつぶしました。

かたほうの頭をなくした黒い頭の鬼はふらつき始めたのです。クロは、その黒いほうの鬼の頭におもいきりぶつかってたおすと、黒い鬼の頭をすどいつめときばで、からだから切りはなしたのです。

でも、クロもこのたかいかいで力を使い果たしたのです。鬼をたおしたあと、クロも地ひびきをたててたおれました。

たおれたクロのそばに、さとるが行くと小さな子犬のクロにもどっていたのです。クロはさとるを見てくんくんと鳴きました。さとるはクロに「死んじゃだめだ、クロ！クロ！・・・」とよびつづけたのですがとうとう死んでしまったのです。

さとるは、三日間も自分が眠っていたのを、あとで聞きました。

さとるはゆめのなかのクロは強かったなあと思いました。

でもさいごは小さな子犬のクロで死んだのです。それを思うとまた悲しくなりました。

さとるは、早くおとなになりたいと思うようになりました。でも、いくら心で思ったからといって急に成長するわけではありません。

いきものには、早くおとなになるのもいれば、おそいのもいるのです。

さとるはなぜ、それぞれの成長がちがうようにだれがきめたんだろう？自分はなぜ人間になっただろう、どうしてほかの動物や、生き物は違う形なんだろう？

先生は、このせいかいは弱肉強食というむずかしいことばをいうけれど、いつかはみんな死ぬ。死んでしまったらどうなるのだろうか？さとるのあたまに何か分からないことが、次々とわいてきました。おとなのひとや先生は、いのちがだいじだと言っけれどいのちは人間だけではなく、生きているものには、みんないのちがある。

だいじなら、生きているものはみんなどんなものも、なにも人間じゃなくてもほかのいのちも、いのちには変わりはない。

ぎもんはどんどんふえて、さとるの頭はよくわけがわからなくなってきました。

さとののしつもんに、まわりのだれもおとなになったら分かる
と言います。

でも、そのおとなのひとが、子供のさとのしつもんにはちゃんと
こたえてはくれません。

さとは、おとなのひとがよくいう、かみさまやほとけさまが
いて、なぜこんないろいろな生き物や木や草や花や太陽や月や星や地
球やうちゅうが、なぜひつようなのか？なんのために生きているの
かと、どうせ死ぬんだったら生きるのは何のためか、生きるにはほ
かのいのちを食べないと死ぬのか。ほかの、いのちと人間のいのち
とどこがちがうのか・・・。

さとの頭もなんだか変になりそうでした。自分の親も子供より
自分のいのちがだいじなひともいる。

さとは自分の親でそれをたいけんした。

おとうさんもこんなことを考えて、こころの病気になったのかな
あ。

それとも、クロも自分のように考えるのかなあ・・・。

さとは今の自分では、頭がすぐぼおっとなってそれいじょうは
考えられません。だから、早くおとなになってもっとたくさんしり
たいことがあったのです。

でも、さとは学校の授業はきらいでした。さとののしりたいこ
とはちつとも教えてはくれません。分からないうちに先に先にと進
んでしまうのです。

さとは、ますますおとなはあまり信用できないと思ってきまし
た。

そう思うと、とてもクロに会いたくなりました。

クロと自然のなかで野原を思いきり、かけまわってあそんでいる
と何も考えなくてもいいのです。

さとは、まだ子供でしたが自分の感情を前よりも表にださない

ようになってきました。まわりのひとはだれも、さとるが何を考え
ているのか分かりませんでした。

さとるは田んぼのあいだの細いあぜ道を通って帰っていました。
まわりは稲のほが太陽の光をつけてまぶしい黄緑です。その稲のほ
が風にゆれています。かえるが、さとるが通るとぴよんと飛んで逃
げます。

ばったもいます。まわりのけしきを見ていると本当にのどかな感じ
です。でも、この稲は人間が食べるために育っているんだ。植物は
それをしっているのかな。かえるも虫を食べているし、かえるはへ
びに食べられる。

どんな生き物も、自分が生きるためにほかの生き物を食べるんだ。
もし、かみさまやほとけさまと会えたら、どうして生き物が、生き
物を食べないと生きていけないのか聞いてみよう……。

さとるはそんなことを考えながら、たんぼのあぜ道をゆつくりと
歩いていました。とちゅうで、へびがかえるを飲みこんでいるのを
見ました。へびはかえるを頭から飲みこむのです。かえるの足がへ
びの口から出ています。

前のさとるだったら、へびを木のぼうでたたいてかえるを助けて
いたのですが、今のさとるにはできませんでした。

さとるは、急いでそこを通りすぎました。

さとるが気づけられている家の前に着くと、さとるは自分の見た
ものを、また大きく目を開けて見つめました。

そこに、クロがいたのです。

クロはさとるを見つけると、ゆつくりと近づいてきました。

さとるは、クロを見ておどろいたのです。

クロの首のまわりは血だらけになっています。クロの首輪から鉄
のくさりやクロが歩きたびにじゃら、じゃらという音をたて、その
くさりのさきには鉄のぼうのくいがついているのです。

クロの口もきずだらけです。クロはかすれた声で鳴いているのでした。吠えたくとも、のどをいためているのでおおきな声が出ないのです。

足もいためているようで、よたよたとしか歩けません。あの老人の夫婦が、クロににげられないようにがんじょうな鉄のくさりや鉄のくいでクロをつないだのです。

クロは、くさりがかみきれないと分かると、鉄のくいごと引きぬいたのです。鉄のくいは三十センチくらいあります。

それを引きぬくのになんども、なんどもクロは必死で引っぱったのでしよう。それでのを首輪できずつけ、歯でもくさりや、くいをかんでほめこうとしたのでしよう。

そのときに足をいためたのか、くさを付けたまま走って、どこかからまっていたためなのか、それはどちらかわかりませんが、鉄のくいごと抜いてくるのはかんたんにできることはありません。

さるとやつと会えてうれしそうにしっぽをふり、かすれた声で鳴いてよろこぶ、いたいたいしいクロを見てみると、さるとはただクロをだきしめてただ、泣くことしかできませんでした。

兄も弟もさるとるをあずかっている家の人たちも、みんなクロのやせて、きずだらけのすがたを見るとびっくりしていました。

「かわいそうだけど、しょうがないねえ・・・」
と言つて、みんなそれぞれ何ともいえない顔をしていました。

さるとるは、きずぐちをきれいな水で洗ってクロのそばにいました。クロが来たその夕方に、またクロをあずかっている老夫婦が来ました。

その老夫婦も、クロのすがたを見ると何ともいえない顔つきをして涙をながしていました。

さるとるは、息ができないほど胸がくるしくなりました。

さるとるも大声で泣きたかったのですが、声を出さずにいました。

さるとるよりクロのほうが、もっと、もっと、つらいはずです。

クロが、どんなに必死になつてさとるに会いに来て、また引きはなされるのです。さとるは声は出しませんでした、涙は次々とあふれて止まりませんでした。

さとるはこのとき、自分に強く言い聞かせました。自分がクロをかわいがりすぎたんだ。クロがこんなひどいめに、つらいめにあうのは、みんな自分のせいだ。自分かつてにクロをかわいがらなければ、クロはこんなつらいめにあうこともなかったんだ。

もう、二度と犬はかうまい、と。さとるはけっしんしたのです。

*

のぶおは、お父さんの話しをしんげんに聞いていました。

お父さんの話しが終わっても、のぶおは口をしつかりと結んだままクロのことを考えていました。のぶおもクロがかわいそうで、そのさきがどうなったのか知りたかったのですが、またはなされるのが目にうかびます。

クロはなんども、なんども、死ぬまでくり返すにちがいありません。のぶおはそう思うと、自分まで何ともいえない悲しみがでてきました。

のぶおは下を向いて涙が出て止まらなくなりました。

お母さんもクロのことは聞いたことはありませんでしたが、こんなにこまかく聞いたのは初めてでした。お母さんもいつのまにか涙がでています。

お母さんが、お父さんにのぶおが子犬をほしがっていることを話したときに、強い言い方で「だめだ！」と、なぜあんなにきつく言ったのか、やっと分かりました。

お母さんは、このクロの話しをしたお父さんも、自分のつらい思い出をもう一度思い出して話すのはくるしかったらうと思いません。

お父さんは、のぶおの頭をやさしくさわりながら言いました。

「お父さんも、のぶおの気持ちはよくわかる。お父さんも犬は大好きだからね。クロのことは今でも忘れたことはない。よく似た犬を見ると今でも何とも言えない気持ちになる。うちが庭のある家なら犬をかつてもいい。でもお父さんがたいけんしたことは、家があるうが、なかるうが、それとはあまりかんけいのないことなんだ。生き物をかつつてことがどういうことか？今ののぶおにはまだ、むずかしいかもしれないけど、そのうちにしんけんに考えるときがくる。今のお父さんは、クロにいろんなことを教えてもらった。いつも、つらい時はクロのことを思うとがんばれて何ともなかった。今日は、そのチビと一緒にねなさい。また、明日にのぶおの思ったことを聞こう」

のぶおは、ひくひくと泣きながらチビをじっと見ました。

次の日の朝です。

のぶおは、お父さんのところに行つて言いました。

「おとうさん、ぼく、チビをあきらくんに返しに行く」

のぶおは、はっきりとした大きな声でお父さんに言ったのです。

お父さんは、ただやさしくうなずいていました。

「よし、お父さんも、のぶおと一緒にしよう」

あきらくんの家の両親と、あきらくんにお父さんは何度もていねいにあやまっていました。

まるで、自分が悪いことをしたかのように、何度も、何度もあやまっているのです。

のぶおは自分のしたことなのに、お父さんがこんなにあやまるのを見て、お父さんの話したクロをもらった老人の夫婦のあやまるすがたが、のぶおの目のまえにはつきりと見えたのです。

了

(後書き)

この物語は自分自身の体験を元にして生み出された。
生き物を飼うということの問題が含まれている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4464g/>

「クロ」

2010年10月8日15時27分発行